主論文の要約

Mycobacterium tuberculosis infection in cancer patients at a tertiary care cancer center in Japan.
（邦訳：日本のがんセンターにおける結核感染症の特徴）

東京女子医科大学血液内科学教室
（主任：田中淳司教授）
藤田崇宏

Journal of Infection and Chemotherapy 20 巻 3 号 213-216 頁（平成 26 年 3 月 25 日発行）に掲載

【目的】

悪性腫瘍は結核症の発病リスクとして知られている。結核の発病は元々の人口の結核罹患率によって影響を受けるため、がん患者の結核症のスクリーニングや早期発見の戦略を構築するには地域の罹患率のデータを考慮する必要がある。しかし日本における悪性腫瘍の患者の結核症の特徴は報告が乏しい。そこで我々は日本の第三次医療ケアを行うがんセンターにおいてがん患者の結核症の特徴を研究した。

【対象と方法】

2002 年 9 月から 2008 年 3 月までの間、静岡県立静岡がんセンターにおいて微生物学的に結核症の診断がついた患者の診療録を後方視的に検討した。

【結果】

24 例の患者が活動性結核と診断されていた。男性は 18 例（75%）、女性は 6 例（25%）であった。年齢の中央値は 72 歳（56-89 歳）であった。23 例が固形腫瘍の患者であった。

発症の 2 ヶ月以上前からフォローを受けていた患者 15 例の 12 例が初期評価の CT または胸部レントゲンで陳旧性と判断できる病変を有し

ていた。

化学療法中に発症した 7 例のうち 5 例が、化学療法開始前の画像で陳旧性結核の画像所見を呈していた。

10 例の患者で結核の発症によるがん治療の遅れ（化学療法の中断、手術の延期）がみられた。

【考察】

今回の研究では日本のがんセンターにおける活動性結核のがん患者には胸部の画像診断で陳旧性結核の所見を呈していることが多いことが示された。また結核の発症ががん治療の遅れの原因となりうることが示された。

がん患者の免疫状態は多様性に富むため、結核症のスクリーニングの対象とすべきかどうかは症例ごとの判断が必要だが、陳旧性の肺病変を有する症例では特に注意が必要であることが示された。

【結論】

日本のがん患者においては、胸部の画像診断で治癒した結核症を示唆する陳旧性の所見を呈する場合に、結核症のスクリーニングの対象とすることが望ましい。化学療法を受ける患者で潜在性結核のスクリーニングと治療に利益があるかどうかはさらなる研究が必要である。